

サッカーで生まれ変わったまち



(上) 芝のサッカーグラウンド約80面が集積する波崎地区。(下) 横山氏が地域の各宿のオーナーと培った連携を生かし、合宿先でのマッチメイクや大会運営を行い、幅広いニーズに対応。

地元連携で生まれたサッカータウン

茨城県神栖市波崎地区(旧波崎町)は「サッカータウン波崎」のキャッチコピーを掲げ、「合宿の聖地」と呼ばれています。大小合わせて約80面の芝グラウンド(うち15面は人工芝)があるほか、体育館、アーチェリー施設などがあり、年間を通して使用可能なスポーツ施設が集まった全国でも珍しい地域です。しかも約80面の芝グラウンドの所有者は地元旅館業協同組合

に加盟する19の旅館。各宿がグラウンドを保持管理して、大会や合宿を受け入れているといえます。年間利用者数は約30万人、その経済効果は年間20億円超ともいわれています。

そんな「サッカータウン波崎」は、スポーツマネジメント株式会社(旧波崎)の創業者である横山周一氏の思いから生まれました。1990年、横山氏は自分

の子がサッカーを始めたのを機に少年サッカーに携わるようになります。そこで不十分なグラウンド環境を知り、少年を含めたアマチュアのための芝のグラウンド作りを決意。当時はまだサッカーが今ほどメジャーではなく、芝のグラウンドを一般開放している合宿地はありませんでした。

そんななか、候補地として約2年かけて絞り込んだのが波崎地区。当時の波崎地区を訪れる人といえば、夏の海水浴客と出張に来る会社員、工場関係者くらいで、海水浴客は日帰りで来る人が増えて宿泊客の減少に歯止めがかからない状態だったそうです。横山氏は波崎旅館業協同組合に天然芝のサッカー場の話をもちかけます。

Jリーグもまだ発足していない時代、いきなりの相談に組合側もサッカー選手やチームが宿の常連になる時代がくるとは信じられません。

そのなかに1人、合宿予定のサッカーチームのために予約していた企業所有のグラウンドが直前に使用を断られ、宿泊がキャンセルになったという宿のオーナーがいたそうです。信用問題にもかわかることで、自分たちでグラウンドを所有する必要性を感じていたオーナーは、横山氏の意見に賛同したそうです。横山氏はそのオーナーの協力を得て波崎地区でサッカー大会を企画。すると予想を超える387チームの応募があり、それを知った各宿のオーナーが少しずつ横山氏の意見に耳を傾けるようになったといいます。宿へのエアコン設置の必要性や食

事&栄養面のアドバイス、熱中症対策である製氷の準備などを伝え、サッカーの施設見学にも同行してもらった。芝のグラウンド作りと並行して宿の関係者に受け入れ態勢を整えてもらいました。

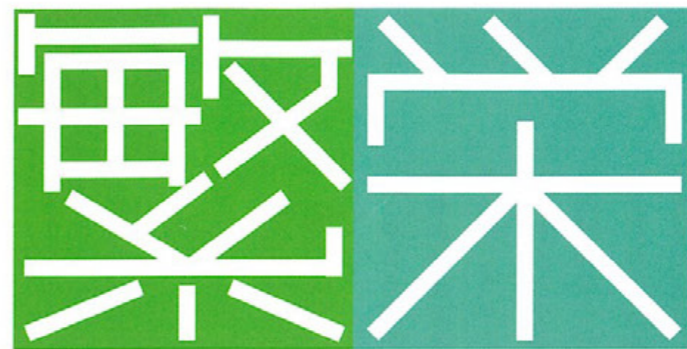
スポーツマネジメント株式会社チームマネジメント事業部の中島康之氏は、「波崎地区で培ったノウハウを活用して、群馬県、長野県、山梨県などでも合宿地を手がけ、対戦相手のマッチメイクや合同合宿のセッティングなど、効率的かつ効果的な合宿運営を行っています」と話します。スポーツ施設、宿泊施設、サッカー愛好者が三方よしとなった取り組みが、サッカー愛好者の聖地になり、地域の新たな可能性を生み出しているようです。



アマチュアサッカーチームの合宿先として人気があり、その経済効果は大きい。



7 2020年7月号
Vol.482



ビジネスリーダーのための情報誌

BEST PARTNER
大樹生命
日本生命グループ
ALL for ALL.
ひとつひとつの、夢によりそう。

Special Talk

アイデアと行動力で 新市場を開拓

株式会社丸ふじ 代表取締役 後藤祐平氏



Monthly feature Pick Up! Facility

交流拠点として支持を集める
車を売らないシヨールーム
CLIPHROSHIMA
スポーツがたく未来、持続性ある地域活性化へ
官民連携が生み出す
地方創生のカタチ



©松本零士
独自のお弁当作りを手がける株式会社丸ふじ(福岡県北九州市)